

SVA2008 年春インターンシップ報告書

テーマ1

SVA 移動図書館事業から見たラオスの教育における図書館の役割

東京外国語大学
ラオス語専攻三年
齋藤沙里

0 . 研究動機

図書館支援事業はSVAの活動において非常に大きな比重を占める。またSVA以外のNGOでも図書館支援事業を行っている団体もいくつかあり、ラオスにおける教育支援にとって重要な支援のうちの一つであると考えられる。

日本においては学校図書館法という法律が制定されており、その第三条において、「学校図書館は、学校教育に欠くことのできない基礎的な設備」と述べられ、全ての学校に設置が義務付けられている。

このように、図書館は当然のごとく全学校に設置されており、公立図書館も全国に数多く設置されているため、日本において図書館の存在意義について考えさせられる機会は極めて少ない。それと比べラオスには図書自体の数も少ないため、大部分の学校に図書館が設置されていないことに加えて、本屋の数も数えるほどしかなく、所得の少ない家庭にとって本は高価なものであるため、生まれたときからほとんど教科書以外の本に接した事のない子どもや大人がたくさん存在する。このように日本とラオスの図書の数や図書館の設置状況は大きく異なる。このことから私は、ラオスの人々にとっての図書館の存在は日本における図書館の存在とは大きく異なるのではないかと考えた。

そこで、このレポートではSVAの図書館事業の中で移動図書館事業に焦点を当てて、ラオスの教育における図書館や図書の役割を調査し、学校や教育における図書館や図書の存在意義について検討したいと思う。移動図書館事業に焦点を当てた理由は、SVAの図書館事業の中でも、学校の状況や本を手にしたときの子どもたちの様子を一番多く目にすることができると考えたからである。以下に調査方法と調査結果を示す。

1 . 調査方法

小学校を訪問し、学校においてどのような教育活動がなされているのかを調査する。

移動図書館事業に同行し、活動の全容を把握すると共に、利用者についても調査する。

移動図書館の担当のスタッフの方や実際の利用者の方にインタビューすることにより、移動図書館の存在意義や、現在抱えている課題等について調査する。

2. ポンパパオ(Phonpapao)小学校の事例研究

. 調査の目的とポンパパオ小学校の概要

この章ではラオスの唯一の義務教育である小学校においてどのような教育活動が行われているかについてより具体的に明らかにするために、ある一つの小学校を訪れ調査を行った結果を示す。時間の関係上一校のみでしか調査できなかったため、この調査結果をヴィエンチャン市全体、ましてやラオス全体の教育活動の表れであると述べることは不可能であるが、ラオスの小学校における教育についてより実際に調査することにはある一定の意義があると考え、実施した。またこの一つの事例研究からラオスの教育について予測できることを調査結果と共に示したいと思う。

ポンパパオ小学校はヴィエンチャン市郊外のサイサッタナック郡ポンパパオ村にある小学校で、SVA が 2008 年 2 月から移動図書館支援を行っている学校の内の一つである。ポンパパオ村はヴィエンチャンの中心部からバスやトゥクトゥクで約 15～20 分離れたところであり、学校の周りには小売店や食べ物の屋台等が並んでおり、郊外といっても活気のある村であると言える。総生徒数は 160 名、教師数は校長を入れて 6 名である。無資格教員はおらず、全員が教員免許を取得済みである。校舎は 1960 年に建てられたもので、図書室を入れて 6 つ教室があり、敷地内に幼稚園が併設されている。

私は、2008 年 3 月 12 日水曜日に、学校が始まる午前 8 時半から学校が終わる午後 4 時までポンパパオ小学校に滞在し観察・インタビューなどを通じて、子どもたちや先生がどのような学校生活を送っているのかについて調査した。

下の表は各学年(各教室)に在籍する生徒数と、調査日に出席していた生徒数を示している。

学年	在籍生徒数			調査日の生徒数	
	合計	男子	女子	合計	欠席
一年生	44	20	24	39	男女別不明 5
二年生	20	14	6	17	男 3
三年生	32	21	11	32	0
四年生	36	17	19	35	男子 1
五年生	28	17	11	28	0
合計	160	89	71	151	9

注)調査日とは、2008 年 3 月 12 日(水)のことである。

. 学校生活

一日のスケジュール

ポンパパオ小学校の一日は 8 時 10 分前のそうじから始まる。そうじを済ませると各教

室・学年ごとにゲームや歌の練習、踊りの練習などのアクティビティを行う。基本的なスケジュールは以下のようなものである。その後 8：30～1 時間目が始まる。一時間の授業は 50 分間、幼稚園は 30 分間である。休み時間は午前中に一回、お昼休みが一回、午後一回の計三回ある。お昼休みには生徒たちは家に帰って家でご飯を食べる。一日のおおよそのスケジュールは以下のようになっている。

ボンパバオ小学校一日のスケジュール

7：50～8：00(10 分間)；朝のそうじ
8：00～8：30(30 分間)；アクティビティ
8：30～9：20(50 分間)；1 時間目
9：30～10：20(50 分間)；2 時間目
10：20～10：50(30 分間)；休み時間
10：50～11：40(50 分間)；3 時間目
11：40～14：00(140 分)；昼休憩
14：00～14：50(50 分間)；4 時間目
14：50～15：10(20 分間)；休み時間
15：10～16：00(50 分間)；5 時間目

一応は上記のようなスケジュールで動くことになっているが、実際はこのスケジュール通りには進まない。休み時間が長くなったり、1 時間目と 2 時間目がつながっていたりする。学校の進み方が授業の進み具合などにかなりの影響を受けており、非常に不規則的であると感じた。

3 月 12 日のボンパバオ小学校

朝礼：この日は校庭で朝礼があった。きれいに整列して以下のような活動を行った。



全校生徒が集合し整列する



読経 & 先生への感謝の言葉を唱和



エクササイズや手遊びも行う

朝礼中は最高学年である五年生の生徒が前に出て全校生徒に指示を出す。先生はほとんど指示などせず、生徒主導によって進行される。みなきれいに整列して、きびきび動いており、この学校は集団生活における規律のようなものをしっかり学ばせようと努力しているということが理解できた。手遊びなどは子供向けの内容である気がしたが、上級生も恥ずかしがらずに楽しそうに取り組んでいる姿に驚いた。また、読経や、先生への感謝の気持ちを述べるなど、仏教国ラオスの側面も見取ることができた。これ以外には掛け算九九を全員で言わせたりしていた。移動図書館車で訪問した際に、ポンパパオ小学校の生徒たちは比較的集団行動に慣れているように感じたのは、日頃からこのような活動をしているからなのだとということがわかった。

休み時間と食事

昼休みになると生徒たちは家に帰って食事をするが、先生は外に買出しに行き教室で昼食をとる。本来はオフィスが先生の職員室を兼ねており、そこに先生たちが集うことが一般的であるが、この学校のオフィスにはファンがなく快適でないために、今では二年生の教室が先生の集合場所となっていた。昼休みも半ばを過ぎると、昼食を終えた生徒たちがだんだん集まってきて校庭で思い思いに遊び始める。“けんけんぱ”のような遊びをしたり、ブーメランのような遊び道具を家から持ってきたりしている子もいた。また大きな木がい

くつかありその下は座って休めるベンチのような作りになっているので、上級生の女の子がそこに座っておしゃべりする姿も見られた。日本のように休み時間に教室にいる生徒はおらず、みな元気に校庭を飛び回っている姿が印象的だった。

昼休み以外にも午前と午後各一回の計二回休み時間がある。この時間になるとみんなお菓子を売っている店に駆けて行って、好きなお菓子を買って食べる。アイスクャンディなども売っていて、みんなおいしそうに食べていた。どの休み時間でも生徒も先生もおやつを食べる習慣があるらしく驚いた。



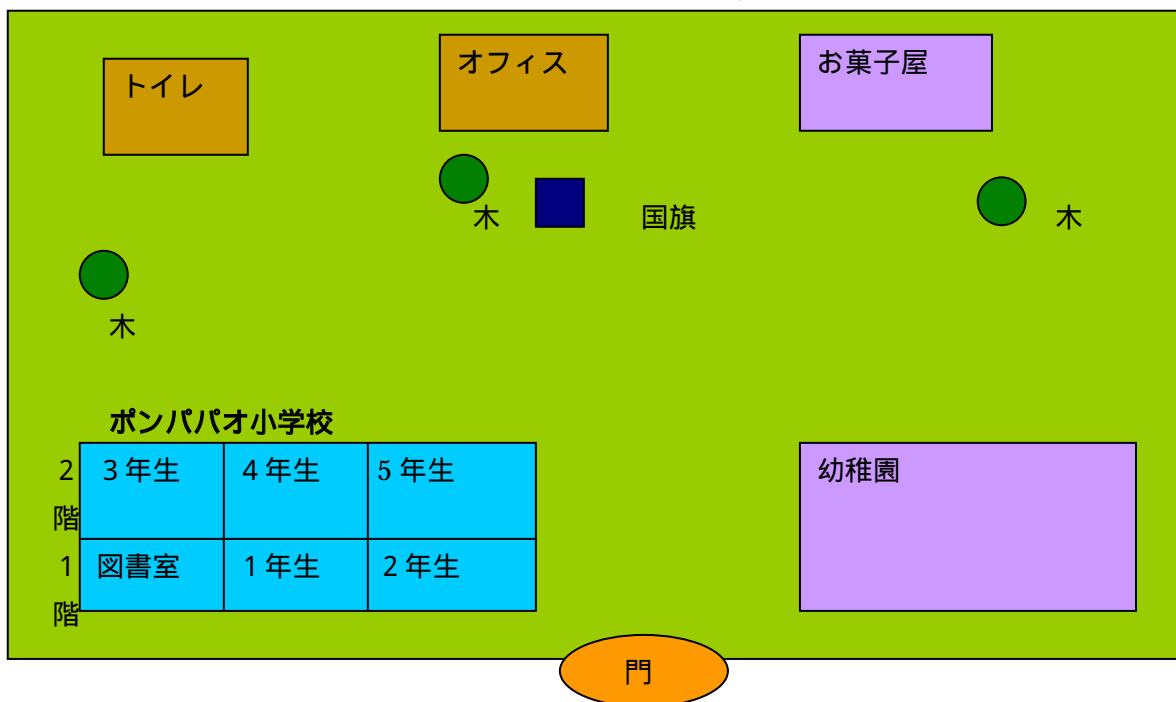
みんなで工夫して遊んでいる



木陰で涼む生徒たち

学校の施設

ボンパパオ小学校の施設を図で示すと以下のようなになる。



校舎

校舎には6教室あり、一階に1、2年生の教室と図書室、二階に3、4、5年生の教室がある。校舎は毎日二回ずつくらい掃除をしているためか、廊下などもとてもきれいであった。

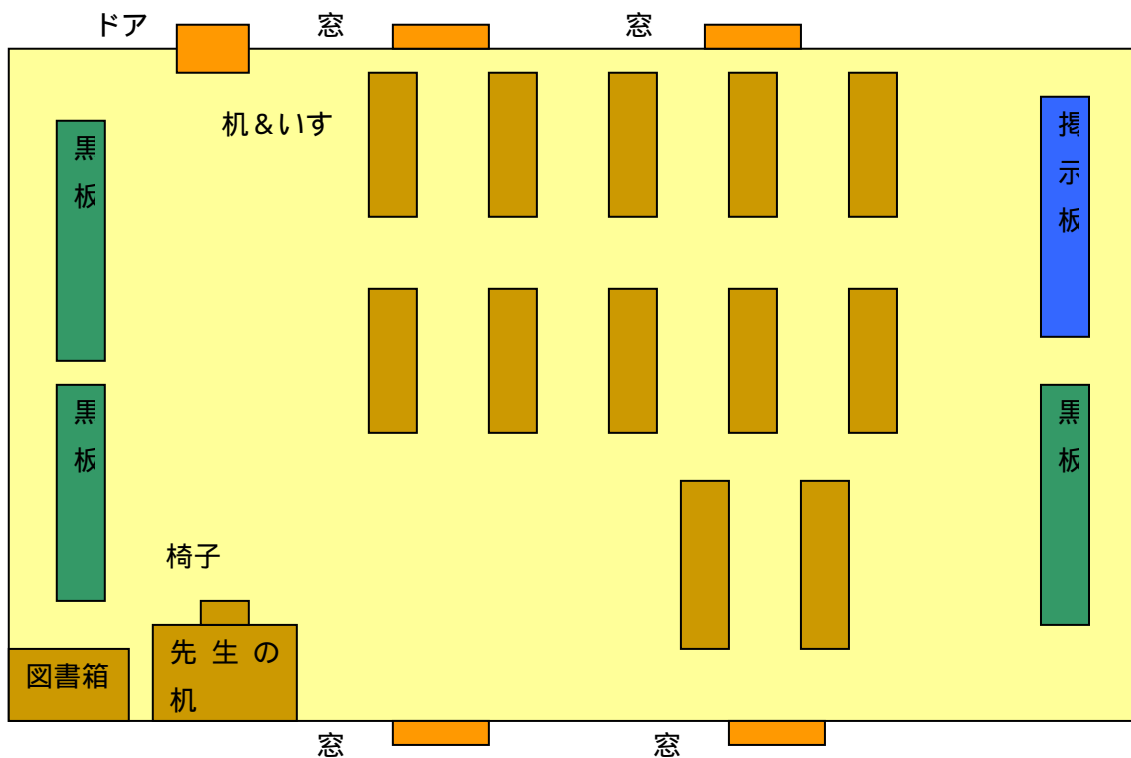


校舎はこんな感じ

校庭

校庭の中央には国旗の掲揚台があり、ラオス国旗が揚げられていた。また木がたくさん植えられていて、校庭のあちこちに木陰ができていて、大きな木の下には生徒が多数集まっていた。また、記念樹もかなりの数植えられていて、緑がとても豊かな校庭であった。

教室の中の様子(例：4年生の教室)



これは4年生の教室である。机や椅子の数は各教室の生徒の人数によって差があるが、それ以外については他の学年の教室もほとんど変わらない構造である。教室にはファンと電気がどちらもある。黒板は前に2つ後ろに1つの計3つあり、黒板には日本の小学校と同じように今日の日付や出席人数などが記入されている。また、教室の後ろに掲示板があり、時間割やテストの結果などが張ってある。教室の壁にはどの教室にもラオス語のアルファベット表が張ってあった。また各教室には図書箱(鍵がかかっている)があり、本がいくらか入っていた。しかし鍵がかかっており生徒が自由に読める環境には無かった。



教室の様子(4年生)

二人か三人で一つの机を使っている

図書室



各教室に設置されている図書箱

図書室にはファンがなく、電気もなく真っ暗であり、本の数も 60 冊程度であった。また置いてある本はかなり古い本ばかりで、痛みも激しかった。先生の話によると、図書室は暗くて暑いので、生徒たちは本を借りて行って家で読むとのことであった。図書室とは名ばかりで、本がただ無造作に置いてあるだけであった。せっかく教室があるにもかかわらず、設備の不十分さゆえに図書室に生徒たちが集えないことを知り非常に不甲斐ない気持ちがあった。

オフィス

ラオスの小学校には必ずオフィスがあり、多くの場合には校舎の中に入っているが、ポンパオの場合には校舎とは離れた場所にある。オフィスには学校に関する基本的な情報(生徒の数、先生についての情報など)が掲示してある。一般には、休み時間になると先生たちはこのオフィスに集まるが、ポンパオの場合には前述したようにオフィスの非快適さゆえ、先生たちは二年生の教室に集まるため、オフィスはほとんど利用されていなかった。



図書室の様子



オフィスと国旗掲揚台

生徒の身なりについて

女子生徒のほとんどがラオスの伝統衣装のシンをはいており、男子も女子もみな学校指定のシャツを着ていた。また、カバンも全員が持っているようで、リュックサックで通っている生徒が多かった。

. 授業の様子

午前中

4年生、算数

授業はまず宿題の答えあわせから入る。この日の授業内容は3桁もしくは4桁の割り算であった。発表したい人に手を挙げさせ、先生が指名し指名された生徒が前に出て黒板に答えを書く。正解かどうかをクラス全員に自分で尋ねさせ、正解だった時には大きな拍手をするというのが日本にはない習慣であり、どのクラスでも行われていたが、発表した生徒の自信につながるとてもよい指導法だと思った。

宿題の答えあわせが終わると、練習問題を時間制限付きで解かせた。早く解き終わった生徒が、解くのに時間がかかっている生徒を積極的に助ける姿が見られた。

タイムリミットになると提出を絶対に受け付けない。提出締め切り後に、提出できた人が今日の出席人数の何%かという質問をし、みんなでその答えを計算した。先生は、身近な話題と算数を結びつけると同時に、助け合うことの大切さを伝える工夫をしているとのことだった。

授業の終わりに、いつも朝のアクティビティの時間や授業の時間を使って練習している歌と踊りを披露してくれ、嬉しかった。



挙手しているところ



歌と踊りを披露してくれた

5年生、私たちの身の回り(歴史)

次に見たのは5年生の歴史の授業である。まずは教科書を棒読みで大きな声で音読させる。5年生だが、まだ読んでいて途中つまづくのが気になった。しかし、大きな声で本を読む習慣が日本よりもあるなと思った。

音読が終わると、前回までにやったところの復習のために、先生が黒板に質問を書く。そしてグループに分かれてその問いに対する答えを考える、いわゆるグループ学習を取り入れていた。6グループ(グループにつきメンバーは4~6人)に分かれ、10分の時間制限の中で解かせる。黒板に答えを書かせ、みんなでその答えを音読させる。正しい答えをみんなでまた繰り返し音読し、暗記している人が手を挙げ発表する。できていたら大きな拍手をする。

歴史の授業であることもあり、暗記が目標に設定されていることがわかった。何度も何

度も同じことを先生が繰り返したり、暗記してそれを発表させたりするというのは日本の歴史の授業にはない形式である。あまりにも暗記に傾倒し過ぎている様にも思えた。また、何もしない時間が多くあり、その時間が生徒たちの集中力を削いでいるようだった。例えば、何人かが前に出て答えを書いているときや、話し合いが先に終わってしまったときなどである。先生の講義中心なので、集中している生徒としていない生徒との集中力の差があるなと感じた。

授業の終わりに、手首足首の運動などのエクササイズをしていた。その後は歌を歌って聞かせてくれ、最後にはゲームをして授業が終了した。



グループ学習



前に答えを書いているところ

午後

2年生、算数

四算の授業をした。足すとは、引くとは、かけるとは、割るとはどういうことかを復習し、自分の体を使って記号を表現させていた。日常的な例を出してできる限り日常と結びつけて教授する努力が伺えた。

この授業でも練習問題を解かせる際にグループを作って問題を協力して解かせていた。数をたくさんこなすのではなく、ひとつひとつの計算過程を確かめながら計算することに重きを置いた授業だった。みんな解くときには、九九を唱えたり、自分の指を使ったりしながら、一生懸命解いていた。

授業では教科書は使っておらず、先生が考えた問題を解いていた。教科書について先生に質問したところ、教科書は配布されないのだから、市場で買わなければならない、買えない生徒は友達に見せてもらうのだと言っていた。先生の机にあった教科書も1999年の古い版のものであり、教科書がヴィエンチャン市内の学校にすら行き渡っていない現状を目の当たりにした。

このクラスでもみんなが歌や踊りを披露してくれた。一人で訪問したにも関わらず、あたたかく迎えてくれ、本当に嬉しく感じた。



カラダを使って数を表現させる



一生懸命指を使って考える

1年生、ラオス語

最後に見たのは1年生のラオス語の授業であった。同じ文字を先生の後について何度も読む練習をし、一通り前回の復習をした後、ディクテーションをしていた。一人の生徒が代表で黒板に答えを書き、それ以外の生徒は自分のノートに書く。一通り終わったところで黒板に書いてある答えが正しいかどうかをみんなで見直す。間違っていたら生徒に訂正させ、みんなで正解を作り上げていく過程を大切にしている授業であった。最後にノートを回収し、先生が個別にきちんとチェックしているようだった。

ディクテーションの際に後ろを振り返って黒板の答えを見て書いている子も見られた。人数がかなり多いので、コントロールの難しさを感じた。



代表の生徒が黒板に書く



みんな一生懸命書いている

. まとめ

最後に、この一日訪問で気づいた点についてまとめようと思う。

物資面、施設面

机・いす等の不備

机や椅子などの物品はあることにはあるが、古いものが多く、がたがたしているものがかなりの数あった。

ファンの不足

図書室・オフィスにファンがなく、設備が無いからこそ、そこに集まることができない状況にある。

教科書不足

教科書は教育省からは配布されないため生徒自身がタラートで買わなければならない。先生も新しい版のものは持っていない。買えない生徒は友達に見せてもらうということであった。教科書がないということは、家で復習しようとか予習しようかということができないということであり、学習意欲のある生徒の自主学習の機会を奪ってしまっていると言えるだろう。

図書室の不備

まず、図書室にファンと電気がないことが大きな問題である。また、本の数は極端に少なく、内容としても古いものばかりであることは問題である。家に本のない生徒は学校という場ですら本を手にするということができないということになると、本を読む機会がほとんどなくなるということである。それは大きな問題であると思う。

教師、授業について

教師の力量に差がある

どの教師もどの教科も授業の構成の仕方はほとんど同じなのだが、生徒に対する呼びかけの仕方や、子どもを授業に集中させる力には大分差があるように感じた。

先生の権限が大きい

一日学校にいて強く感じたのは先生の権限の強さである。休み時間になると子どもにおやつを買ってくるようにおつかいを頼んだり、授業中にお茶を入れさせたり、教師と生徒との間の上下関係が日本よりもかなりあると感じた。先生を慕っているという感じがしたのは一年生のクラスだけで、それ以外は先生を下から見上げているような印象を受けた。

人数が多いクラスでの集中力の維持の難しさ

人数が少ないクラスはまだよいのだが、人数が多いクラスになると先生が生徒全員に目を配ることが非常に難しく、集中力が切れてしまっている生徒の姿を何度も目にした。教室の数並びに教師の数が足りないために、一学年につき一クラスにしなければならない現状があることが大きな理由のうちの一つであると考えられる。

子どもの集中力を維持するにはいかに授業を工夫し生徒が暇になる時間を与えないかどうか、また、生徒に興味をもってもらえる授業ができるかどうかという教師の指導力に任されているといえる。

暗記に傾倒した傾向

4つの授業を見学して、日本よりもさらに暗記を重視する風潮があるということを感じ

た。歴史の授業で文章や事実を暗記させることに加えて、算数の授業でも同じフレーズを何度も繰り返させる場面が多くあり、考える力よりもいかに正確に覚えるかというところに力点を置いているように感じた。

発表の機会の確保

どの教科・どの学年においてもかならず生徒個々人の発表の機会が確保されており、完璧な講義形式の授業は存在しなかった。歴史の授業などは講義のみになりがちだが、質問を作って答えさせるなど、発表させる機会が必ずあることが素晴らしいと思った。また、発表し正解だった場合にはその生徒に拍手をするというのも、発表した生徒の自信につながるという点から、とてもよい教授法だと思った。

グループ学習の多用

ほとんどの授業でグループ学習を取り入れていて、それによって授業の中に変化が生まれていたと思う。

休み時間が多い

休み時間が多いことがラオスの小学校の特徴であると思った。日本では長い休み時間はお昼休みしかなく、しかも普通一時間より少ない。しかしラオスではお昼休みが約二時間あるのに加え、さらに午前と午後毎回ずつ 30 分以上の長い休み時間がある。

スケジュール通りに進まない

授業は一時間につき 50 分、休み時間は……というように一日の学校のスケジュールは決められている。しかし、この通りには進まないのが現状である。一日学校にいてみて、スケジュールがどう動くか読めずに戸惑った。授業が始まる前には手動で始業ベルを鳴らすので、生徒は集まってくるため問題ないが、ここからここまでという決まりに従ってある程度は動かないと、授業と休み時間との間のメリハリがつかないのではないかと思った。

英語の授業をやっている

先生のうちの一人が英語を学んだことがあるので、学びたい生徒に対して休み時間を使って英語を教えていた。みな英語で自己紹介ができて、驚いた。生徒たちは外の世界 = 外国に対してかなりの興味を持っているのだということに気づかされ、国際交流の意味を考えさせられた。

生徒について

挨拶ができる

教室に入るとどのクラスでも大きな声でサバーイディーと挨拶してくれることに驚いた。必ず自然に起立をしてみんな挨拶をしてくれ、他人に対する接し方がしっかり身についていると感じた。

集団行動の規律を守っている

朝の朝礼から始まり授業が終わるにいたるまで、子どもたちは集団の中の一人としての自分を認識し集団行動の規律をしっかり守っていた。

最後に

今回一日ポンパオ小学校にいて、ラオスの小学校において生徒や先生がどんな一日を過ごしているかについて学ぶことができた。先生たちは少ない物資と知識の中で、生徒たちにどう指導していくかを真剣に悩み考えていることもわかった。物資が無いことによって子どもたちの学習が妨げられることの不甲斐なさは大きなものである。また、教師の不足や教師たちの指導技術の向上も大きな課題であると思う。たった一日であったが、ラオスの教育現状をミクロな視点から見つめなおす大変良い機会になった。

3. 移動図書館事業の実際

. 概要



移動図書館車

SVA の移動図書館は、週四回(火、水、木、土)、通常はスタッフ三人で行われる。一日で回る場所は、午前二ヶ所(もしくは一ヶ所)、午後一ヶ所の計三ヶ所(もしくは二ヶ所)であり、2008年3月現在計11ヶ所で活動を行っている。その中には、ヴィエンチャン市内にある小学校7校、チャンサワン村、目の不自由な子どものための施設(Home of Light)、麻薬中毒者のリハビリテーションセンター(Some sanga)、タートルアン広場を含む。

現在図書の本数は3022冊で、図書以外にCDの貸し出しも行っている。図書の内訳は、ラオス語の図書は60%、タイ語が30%、日本語が10%で、それ以外には英語・フランス語・スペイン語などの図書がある。

移動図書館のスケジュールは以下の表のようになっている。

<移動図書館スケジュール>

曜日		時間	場所	生徒数	教師数	教師一人当たりの生徒数(小数点以下四捨五入)
火	午前	9:15~10:15	Nakhouy 小学校	275	11	25
		10:30~11:30	Sangphai 小学校	162	5	32
	午後	14:15~16:00	Some sanga	734		

水	午前	9：15～10：15	Phonpapao 小学校	180	6	30
		10：30～11：30	Chomphet 小学校	280	11	25
	午後	14：15～16：00	Donfai 小学校	119	5	23
木	午前	9：30～11：30	Phangheang 小学校	224	9	24
	午後	14：15～16：00	Dongsanghin 小学校	120	5	24
	夜	17：30～19：30	タートルアン前広場			
土	午前	9：30～11：30	チャンサワン村			
	午後	14：00～15：00	Home of Light	58	3	19

．小学校における活動

はじめに

2008年3月現在、計7校の小学校に訪問しているが、その学校の大きさや生徒の数、教師の数、教師の読書に対する興味関心等は実に様々である。この章では、SVAの移動図書館事業から垣間見ることが出来た、ラオス・ヴィエンチャン市内における学校の現状・問題点を、校舎や設備面、教員側、生徒側という三つの側面から検討したいと思う。また、そのような学校の現状の中で、SVAの移動図書館事業がどのようなことを目標にして行われ、どのような成果をあげており、今どのような問題を抱えているのかを検討する。

スケジュール

通常、小学校における活動の基本的なスケジュールを以下に示す。

移動図書館車到着 子どもたちが積極的に準備を手伝う(シート・本の入ったバスケットの準備)

子どもたちが本を読む(約30～45分間)

スタッフによるアクティビティ(約30～45分間)

準備



読書の時間



アクティビティ



各スケジュールの詳細

子どもたちによる準備

必ずどの学校でも、移動図書館車が到着すると、子どもたちが勢い良く教室から飛び出してくる。そして、シートを敷いたり、本の入ったバスケットを運んだりする準備を積極的に手伝う。その際にスタッフの方が必ず「二・三人で協力してね」と呼びかけ、準備の段階から集団としての意識や人と協力することの重要性を教えようという努力が伺えた。

本を読む時間

生徒たちが本の入ったバスケットの周りに集まり、思い思いに本を読む。学校の先生が積極的に生徒たちに指示をするところ、ほとんど注意も支持も SVA スタッフに任せるところなど、学校によって教師の関わり方は様々である。さらに詳細については次項で述べることにする。

アクティビティ

SVA のスタッフが子どもたちの前で様々なアクティビティを行う。アクティビティが始まることをスタッフの方が伝えると、子どもたちは本を片付け、スタッフの立つマイクスタンドを囲んできれいに並んで座る。私が実際に見ることのできたアクティビティを下にまとめる。

・**歌**：スタッフの方がギターを弾いて、それに合わせて生徒たちが歌を歌う。スタッフの方が自作した「本を大切にしよう」というタイトルの歌や、子どもたちもみな知っている「タマサートバーンラン(私の村の自然)」と一緒に歌った。前章で示した通り、教育省によって定められたカリキュラムには音楽の授業は、一年生で週1時間、二年生以上で週2時間ととても少ないため、声を合わせて歌うのにはなかなか苦労していた。しかし、多くの生徒が間違えることを恐れず堂々と大きな声で楽しそうに歌う姿が非常に印象的だった。

ギターに合わせて、手を叩きながらみんなで歌う



・**クイズ**：スタッフの方が様々な二択もしくは三択のクイズを出す。1、2、3のかけ声で挙手をし、指名された何人かが前に出て質問に答える権利を得る。前に出た生徒は、同

・風船ふくらましゲーム：早く割ったほうが勝ち。もしくは、膨らませて縛って、できるだけ大きく膨らませられたほうが勝ち。どっちが大きいかどうかは、他の生徒たちの意見で決める。

一生懸命膨らませる

見ている生徒たちも大盛り上がり！



・読み聞かせ：SVAのスタッフの方が紙芝居を使って、お話の読み聞かせを行う。私が同行したときには日本の昔話の「舌切りすずめ」をやっていた。話を半分に区切って、続きは来週聞かせるから学校休まないようにね！と呼びかけていた。移動図書館が生徒たちにとって非常に楽しみなものであることが伺い知れた。スタッフの方は、役になりきってそれぞれの登場人物の声を上手に変えて演じていた。「おもしろくないと子どもたちは聞いてくれないから」とおっしゃっていた。このようなアクティビティが可能なのは、スタッフの方のたくさんの努力や準備があるからなのだと痛感した。子どもたちはみなじっとスタッフの方を見つめ、おもしろいときにはみんなで大きな声で笑い、この時間を本当に楽しんでいる様子だった。

紙芝居を片手に読み聞かせる

子どもたちの表情は真剣そのもの



問題点

以下に、私が小学校への移動図書館に同行した中で知り得たラオスの学校・教師・生徒

が抱える問題点を挙げる。

・学校に図書館が無い。

このことが、移動図書館が必要であることの大きな理由であることは言うまでもない。私が訪れることの出来た小学校7校のうち図書室と本棚がどちらもあるのはわずか一校で、どちらも無い学校も一校あった。

・教師自身が図書館や本についての知識を持っていない。

教師自身が本という媒体になじみがないため、本の重要性や存在意義を子どもに伝えることが困難である。先生ですら本を読んだことがない人が多いので、先生たちの中にも生徒たちと一緒に大人向けの雑誌や英語の本などを読んでいる者も多かった。

・教師が積極的に関わろうとしない学校がある。

わたしが最も印象に残ったのは、移動図書館への教師の関わり方である。積極的な教師のいる学校では、下の写真のように、先生を中心に円を描き、先生がその真ん中で絵本を読み聞かせたり、先生が自ら積極的に子どもたちが自分勝手に動かないように指示をしたり、注意をしたりしていた。しかし、多くの学校では、生徒への指示はほとんどSVAのスタッフに任せられており、写真のように教師たちも生徒と同様に本を思い思いに読んだり、生徒たちをただ眺めたりしているだけであった。

先生が絵本を読み聞かせる(写真)

先生が生徒たちを眺めて見ているだけ(写真)



・他人の話を静かに聞くことに慣れていない。

集団行動に慣れておらず、スタッフの方の指示になかなか生徒全員が従わない場面が多く見られた。静かにというとその時には静かになるが、またすぐに騒がしくなってしまう。そのため、学校によっては、スタッフの方はアクティビティをするのに苦労していた。

・本を読むのが好きでない、もしくは文字を読めない生徒がいる。

多くの生徒たちが本を読むのは好きである様子であったし、実際に「本を読むのが好き？」と質問すると、ほとんどの生徒が「好き！！」と元気良く答えてくれた。しかし生

徒の中には、本をぜんぜん読もうとしない子どもも見られた。そのような生徒に「本を読むのは好き？」と尋ねるとつむいてしまって何も答えてくれなかったが、私が文字数の少ない絵本を大きな声で読み聞かせていると、そばに寄ってきて一生懸命耳を澄ましていた。このように、読書が好きな生徒は自ら自分の読める・読みたい本を探し当てて一生懸命読むが、まだ低学年であったり、文字を読むことが苦手であったりする生徒は誰かのサポートなくしては本を読む意欲は芽生えないことが明らかである。読書の苦手な生徒・嫌いな生徒をいかにサポートしていくかがこれからの図書館支援事業にとって非常に重要な課題であるといえる。

・文字を読まずに、絵や写真だけ見ている生徒も多数見受けられる。

特に低学年の生徒はまだ文字を十分に読みこなせないので、近くにある絵本や図鑑を手にとって、その中にある絵と写真を眺めていることが多い。また学年が上の生徒であっても、英語やタイ語などの本に当たった場合、文字が読めないのに絵だけを見ていることも多かった。いかにして文字を読ませるかということも移動図書館事業の大きな課題であると考えられる。

・ Home of Light での活動

はじめに

Home of Light は、目の不自由な方(2008年3月現在：子ども～24歳まで)58人が暮らす施設である。全盲の患者さんが一名で、ほとんどの方が弱視である。施設の前には公園のようにブランコなどが設置されており、移動図書館車が到着したときには多くの患者さんがその公園で遊んでいた。施設の方の話によると、施設で暮らす就学年齢の子どもたちは、施設のスタッフの方に手伝ってもらい、ここから学校までトゥクトゥクなどで通うということである。

活動の詳細

移動図書館車が到着すると、屋根付きの広場にみんなが集まる。Home of Light での移動図書館車の活動は他の施設のものとは異なり、歌と話の読み聞かせがメインである。

歌

今回私が同行した際には、フランス人の歌手のお二人も一緒に出向き、ラオスの曲以外にもその方々が歌ったインドの曲や、私が歌った日本語の曲など、実に多くの曲(7、8曲くらい)を演奏し、コンサートのようであった。患者さんたちは本当にみな音楽が大好きで、大きく手拍子をしながら楽しそうに歌っていた。小学校でもみんなが歌を歌うが、私が見た限りでは、Home of Light の患者さんたちが一番大きな声で歌い、一番大きな音で手を鳴

らしていたように思う。

途中、患者さんの中にギターや太鼓がとても上手な人がいるので、その人も前に出させて演奏してもらったり、歌いたいという人にギターに合わせて一曲独唱してもらったりと、とてもバラエティに富んだ演奏だった。

歌っている間は、前に出ている以外の SVA のスタッフの方はテーブルの間を歌って手拍子しながら盛り上げる役目をする。



独唱している



得意な患者さんが前に出て演奏



スタッフの方がテーブルの間を通り盛り上げる

読み聞かせ

SVA のスタッフの方がえだまめの話を読み聞かせた。鬼の声、男の子の声、鬼が落ちこちる音など様々な声の出し方を変えて、患者さんたちを楽しませていた。

困難点

SVA のスタッフの方にお聞きしたところ、Home of Light のアクティビティでは絵などの視覚的なアプローチはできず “音” だけで笑ってもらわなければならないため、とても難しいとのことであった。そのため、どの施設に行くときよりも多くの準備やシミュレーションを必要とするとおっしゃっていた。スタッフの方の多くの努力が、この施設の子どもたちの笑顔を生んでいるのだな、と実感した。

・チャンサワン村での活動

はじめに

チャンサワン村とは、もともとはタラート・サオの隣にある生鮮市場であるタラート・クアディンの周りに位置していた4つの村の村人が移動させられ集められてできた村であり、比較的経済的に貧しい人々が暮らしている村と言える。SVA の移動図書館車は毎週土曜日の午前中に村を訪問し、貧しい子どもたちが本を読んだりアクティビティをしたりする機会を与えている。

活動の詳細

村に近づくと、音楽を流し移動図書館車が来たことを知らせる。活動が行われるのはチャンサワン寺というお寺の中の広場である。移動図書館車が広場に到着すると、小さな子から中学生までの子どもたちが40人ほど集まって図書館車の周りを囲み、率先して準備をする。小学校のときのスケジュールと同様、初めのしばらくの間は本を読む時間で、その後SVAスタッフの方によるアクティビティが行われる。私訪問したときには、クイズ、歌、ぬり絵の3つを行っていた。しかし、どの小学校の子どもよりも騒がしく指示が行き届かなかったため、歌は一曲で断念せざるを得なかった。必ずしも用意していったアクティビティが上手くいくとは限らないので、臨機応変に内容や時間配分を変更していく必要があると感じた。

問題点

- ・SVAスタッフの方だけで子どもたちをコントロールしなければならない。

他の訪問地には、学校なら先生、タートルアン広場なら子どもの親、Some sanga や Home of Light なら施設のスタッフの方など、SVAスタッフの方の利用者への指示をサポートしてくれる存在がある。しかし、チャンサワン村の場合には、何人かの年配の村人の方が貸し出し手続きをボランティアで手伝ってくれていたが、子どもたちへの指示はやはりSVAスタッフの方のみで行う必要があり、多くの子どもたちをコントロールするのは非常に困

難な仕事であると感じた。

・字が読めない子がいる。

スタッフの方の話によれば、この村の子どもたちはほぼ全員が小学校には通っているとのことであったが、実際に子どもたちとコミュニケーションを取っている中で、全く字の読めない子ども(もう就学年齢に達しているにもかかわらず)もいた。子どもたちによれば「この子は学校で勉強していない」とのことであった。初等教育への就学率は改善の方向に向かっているとはいえ、首都ヴィエンチャンであってもいまだに学校に通っていない子どももいるのだという事実を目の当たりにした。しかしその子に文字の書き方を教えると、なかなか上手くいかないにしろ、一生懸命書こうとする姿があり、初等教育の普及の必要性を強く感じたと同時に、子どもたちの学ぶことへの意欲が伝わってきたように思った。

・騒がしく、アクティビティがうまく進まない。

学校も休みでみなここに遊びに来ているという感覚があるためか、他の訪問先に比べてかなり騒がしかった。SVA スタッフの方の呼びかけや指示も伝わりにくい場面が多く見られた。しかし、みんなでゲームをしたりぬり絵をしたり、本を一生懸命にかじりついて読んだりする姿を見て、他の施設の子どもたちと同様に、移動図書館車の存在は彼らにとって非常に大きな意味を持つのだと思った。



ゲームをしているところ



一生懸命ぬり絵をしているところ

.Some sanga における活動

はじめに

Some sanga はヴィエンチャン市にある麻薬中毒者のためのリハビリテーションセンターであり、学校・病院・図書館が併設された複合施設である。センターの方のお話では、麻薬中毒者のためのリハビリテーションセンターは他県にもあるが、このセンターが最大であるとのことである。このセンターには、2月26日現在734人(うち女性は45人)が暮らしていて、年齢は一番下が13歳一番上は40歳である。このセンターでは6ヶ月間治療を

し、その後施設を出るのが一般であるとのことだった。

併設された図書館について

Some sanga には前述のように図書館が併設されており、その図書館の前で移動図書館を開くが、図書館の蔵書数は非常に少なく、200冊ほどで、その約半分は SVA 移動図書館車から借りているものである。その内絵本は 40 冊ほどあり、その中の 30 冊は日本において行われている“絵本を届ける運動”によって作られたものである。

活動の詳細

Some sanga においては、小学校への訪問時とは異なり、アクティビティは行わずに、患者さんたちが自由に本を読む時間になっている。雑誌を読んでいる人が多かったが、わたしの予想していた以上に絵本を読んでいる人も多かった。「どんな本が好きか？」という質問をすると、経済・動物・外国についてのことなど様々な回答が返ってきた。

問題点

・難しい本になるとタイ語が多い

Some sanga での活動を通して見えた問題点は、より高度な内容の本になるとラオス語の図書はぐんと減り、タイ語の図書が非常に大きな割合を占めることである。義務教育である小学校においてラオス語を勉強し読み書きができるようになっても、結局はタイ語や英語もしっかり学ばないと学問的なアカデミックな文献に当たることができないというのは非常に大きな問題であると考えられる。これは本が出版されにくいというラオスという国が抱える問題を物語っている。

図書館の様子、本棚にはかなり余裕がある



本を読んでいる様子



・タートルアン広場における活動

はじめに

タートルアン広場における活動は、子どもたちが本を読む機会を増やすという目的に加えて、SVA という団体の存在や活動を宣伝し、より多くの人に SVA 図書館に来てもらうことや、より多くの人に読書に興味を持ってもらうという目的も持ち合わせている。タートルアン前広場における活動の際には不特定多数の人が利用するため本の貸し出しは行っていないが、歌・ゲーム・ぬり絵・紙芝居などさまざまなアクティビティも行われ、イベントのような雰囲気である。私が同行した日には、約 50 名が参加しており、親子や 4、5 人のグループで訪れていることが多かった。まだよちよち歩きの赤ちゃんから、お父さんお母さん世代までかなり幅広い世代の人が集まり、市民の交流の場の一つになっているように思えた。

活動の詳細

まだ日の入り前の夕方 5 時半頃からシートを敷き始め、ライトを設置して夜に備える。だんだん夜が近づくにつれ集まる人の数が増えてきて、お母さんが子ども本を読み聞かせる姿や、小学生くらいの子もたちが真剣な表情で本を朗読する様子が見られた。

日が沈みあたりが暗くなった頃から、アクティビティが行われる。歌を歌ったり、体を使ったゲームをしたり、クイズを出したりする。終わりのほうにぬり絵の時間があり、みんな思い思いに色を塗って楽しんでいた。

問題点

わたしが少し気になったのは、この活動が本当に SVA の宣伝になっているのかどうかということである。このタートルアン前広場での活動をきっかけにより多くの子どもたちが SVA 図書館に来るようになってきているのか、読書の大切さはどれくらい伝わっているのか、という疑問である。アクティビティの中でスタッフの方は何度も SVA の名前を出し、宣伝していたが、SVA 図書館の場所であったり、本を読むことの重要性であったり、そのような本当に伝えたいメッセージは呼びかけだけではなかなか広まっていかないのではないかと感じた。実際に来ていた男の子に聞いてみたところ、「タートルアンには毎週来ているが、SVA の図書館には場所がどこかわからないし、行ったことがない」と言っていた。移動図書館を通じて案内を配るなどして、図書館の存在をもっと多くの人に知らせていけたらなと強く思った。



本を読んでいるところ

4 . 移動図書館の役割

以上の調査から、移動図書館の役割を考察する。

読書の機会の増加

第一に挙げられるのは言うまでも無いことだが、読書の機会の増加である。冒頭でも述べたように、ラオスには本自体も本屋も図書館も数が少ないため、子どもたちが教科書以外の本を目にする機会のごく限られている。そんな中 SVA の移動図書館は、子どもたち、さらには大人たちの読書の機会を増やしてくれる存在であり、本を読むことによって学校の授業だけでは学びきれない多くの知識を学び取ることができると考えられる。教科書ですら国中に行き渡らないラオスにおいて、移動図書館がもたらす読書の機会は教育にとって非常に大きな役割を担っていると言えるだろう。

憩いの場・交流の場としての役割

いくつかの小学校では、上級生が下級生に絵本を読み聞かせている姿を見かけたが、これは学年を越えた交流を促進していることの表れであると言える。

また、小学校以外の訪問先についても、移動図書館車の周りに集うことで、その利用者たちの憩いの場となっていることも大切な役割であると思う。特にタートルアン広場では、全くの他人が同じシートの上で本を読み、歌を歌い、ゲームをし、ぬり絵をすることによって、市民が集う憩いの場・交流の場としての役割を果たしていると言えるだろう。

知的好奇心の上昇による学習への動機付け

SVA スタッフの方が行う様々なアクティビティは、ただのエンターテインメントではなく、子どもたちの知的好奇心を上昇させる配慮が様々に散りばめられている。それが顕著であるのはスタッフの方が出すクイズである。クイズの内容の設定はかなり工夫されており、前述したように、諸外国 = 自分の知らない世界への興味を湧かせ、自国 = ラオスについての知識を増えさせるような工夫がなされていた。移動図書館車の活動を通して、新し

いことを知ること・わかることで自分の世界が広がっていくことの楽しさが伝えられているという意味で、移動図書館の一つの大きな役割として、学習への動機付けを働きかけるという点が挙げられるであろう。

発表の機会を与えることによる自己肯定スキルの習得

アクティビティの中で子どもたちは自分の意見や学習の成果などを大勢の前で発表する機会を得ることができる。クイズで正解したら景品がもらえ、不正解でもみんなから大きな拍手をもらえる。このような発表の経験は子どもたちの積極性や自信にもつながり、自分を自分で認める力＝自己肯定スキルの習得に役立っていると考えられる。

集団行動における身の振る舞いの習得

SVA のスタッフの方は常に周り人のことを考えて行動するように呼びかけ、集団で行動する際にどのように振舞わなければいけないかという礼儀作法を自然に教え込む工夫をしているようだった。そのようなスタッフの方の努力の成果は少しずつ見え始めていて、生徒の中には、アクティビティの途中で後ろにいる生徒のことを考えずに立ち上がってしまう友達に対して、座るように注意する場面も見られ、嬉しく思った。スタッフの方の話では「学校ではあまりきちんと並びなさいとか、周りの人のことを考えてとかいう指導はされない。だからこのような配慮が必要である」と述べていた。週一回の移動図書館をきっかけに生徒の他人を思いやる心を育てていくというこの役割も移動図書館の非常に重要な役割のうちの一つである。

教師の質の向上

最後に、わたしが大切だと考える役割は、スタッフの方の指示の仕方やアクティビティの仕方が学校の先生方にとって非常に有効なお手本となるということである。前述のように移動図書館車のスタッフの方は、教育における読書の役割をしっかりととらえ、それを子どもたちに伝えるべくアクティビティを工夫したり、効果的な指示の仕方を考えたりしている。このようなスタッフの方の教育的姿勢は、学校の先生たちにとってかなり良い刺激となり、教師、ひいては教育の質の向上にも寄与しているのではないかと思う。

以上に述べたとおり、SVA の移動図書館事業はラオスの教育において多くの重要な役目を果たしているといえる。多くの教育問題を抱えるラオスの学校や子どもたち、また社会的にハンディキャップを背負った人たちにも多くの知識や夢や希望を届けていると言えるだろう。

5 . 移動図書館事業の課題

このように SVA の移動図書館事業はラオスの教育においてとても重要な役割を担ってい

ることが確かである。この章では、私が今回のインターンシップを通して感じた、今現在の移動図書館事業の課題について述べたいと思う。

蔵書状況の改善

第一に挙げられるのは蔵書状況の改善である。本の中には壊れてしまっているもの、もうかなり古びているものもあり、蔵書状況のチェック体制の強化の必要性を感じた。週に一回は必ずチェックしているが、一回の活動で本が子どもたちによって混ぜられてしまうので考えるべきだと思う。また、様々な言語の本や難易度の本が混ざってしまっかごや棚に入っているために、自分が読みたい本をなかなか見つけ出せない子どもが多数いた。またフランス語の本を英語の本だと思って眺めている子どももまた多くいた。少なくとも「この本は何語だ」ということぐらいはわかって読むべきだと思う。もっとかごや棚を使って分かりやすく配列し、子どもたちが自分の読みたい本を効率よく捜せるシステムを確立する必要があると思う。

子どもたちの意欲

第二に本を読むことが好きではない子ども、まだ文字が読めない子どもにどうやって本を読む意欲を持たせるか、ということも大きな課題であると思う。多くの子どもは本を読むことに意欲があるが、中には特に低学年の子どもでまだラオス語が十分に読めない生徒は本を読もうとしない者もいる。読書が好きな子どもは自分で積極的に本を選び取り、一生懸命音読していて、ラオス語の力の向上や知識の増量が望めるが、本を読むことに意欲の無い子どもたちは、ただ本を与えただけでは読もうとしない。彼らにいかにか本を読ませるかということがかなり大きな課題であろう。この課題を解決はSVAスタッフのみの力ではできないもので、学校の先生たちと協力していくことが必要だろう。

教師の理解

第三に教師たちに読書の意味をきちんと理解してもらい、彼らにも積極的に取り組んでもらうことが必要である。ラオスにおいては大人の中にも、教科書以外の本を読んだことのないものも存在する。そのような本を知らない教師たちに、どうやって本の存在意義を伝え、移動図書館の活動に協力してもらうか、ということも課題の一つであるといえるだろう。

リモートエリアへの発展

第四の課題として挙げられるのは、移動図書館のリモートエリアへの発展である。今現在移動図書館はラオス首都ヴィエンチャン市内でのみ活動中であるが、今まで述べてきたようなラオスの教育に対する影響面から考えて、より多くの地域、特に教育環境の行き届いていないリモートエリアに活動を発展していくことができれば、この移動図書館事業は、ラオスの教育環境改善に対してさらに大きな役割を担っていくことになるだろう。

6 . まとめ

ポンパバオ小学校訪問や移動図書館事業への同行を通してラオスの教育の様々な現状や問題点を把握することができた。本だけでは見えてこないラオスの学校の側面を目で見て肌で感じて体全体で学ぶことができた。その中で、SVA スタッフの方のラオスの教育環境改善に対する熱い思いを感じ本当に感動し、また現場で頑張っている先生の姿を目の当たりにし、ラオスの学校が抱えるハード面の問題の早急な解決を望まなければならないと強く思った。

将来教師になることが目標である私にとって、今回このテーマで調査をしたことにより、教育における図書の持つ役割に加え、日本とは全く異なるラオスの教育現場に飛び込んだことで、「教育とは何なのか」という本質的な問いについても深く考えさせられ、本当に素晴らしい機会を与えていただき心から感謝している。

本を読むということはただ知識を得るということだけでなく、子どもたちが新しい世界や今まで出会ったこともない人と出会う喜びを知り、将来の夢を持ったり、人とのコミュニケーションの仕方を学んだりするための大きなきっかけなのだと思う。ラオスの子どもたちに、学校に通い本を手に取り様々なアクティビティを楽しみ、知らないことを知ること、新しい発見をすることの喜びをたくさん感じてほしいと思う。

現在日本では自ら主体的に学ぶ力の育成や生きる力の育成が大きな課題となっている。そのような力を育成するためには、ただ知識を詰め込ませるのでは不十分であると思う。わたしが移動図書館事業で出会った多くのラオスの小学生が持つ知らないことを知ることに対する強い好奇心や、学んでいるときのキラキラしたまなざしから日本の教育現場は学ばなければならないと思う。日本で教育を志す身として、ラオスの子どもたちの学ぼうとする意欲、先生たちの教えようとする情熱、そしてSVAのスタッフの方の熱い思いに背中を押される思いである。今回の経験をしっかり活かし、自分なりに教育というものをもう一度しっかりと見直し、日本の教育についても改めて考えなければと思う。

今回の調査を通して出会った多くの生徒や先生、そしてたくさんのことを教えてくださったSVAのスタッフの方に心から感謝している。